



会員 木村 康一郎

## “新人” 弁護士

### 1 はじめに

2020年12月に弁護士登録をしてから早1年半が経過した。私は、弁護士となる前は事業会社に7年程勤務し、主に経理・税務や企画といった管理部門での仕事に携わっていた。今回、リレーエッセイへの投稿という貴重な機会をいただいたので、会社員を経験した“新人” 弁護士として感じたことを述べたいと思う。

### 2 とにかく文章を書く

会社員当時は経理や企画といった部署にいたため、大量のデータをシステムから出力し、集計・分析するという業務を多くこなしていた。そのため、業務中によく使うのは主にExcelであり、Wordでの文書作成等の機会は数えるほどであった。

弁護士となってからは（修習生の頃から既にそうであったが）とにかくWordを使うことが多くなり、やはり弁護士は文章をよく書く職業だな…と当たり前のことを実感している。

なお、Excelは自分の頭に代わって大量のデータを計算・処理してくれるが、Wordは、自分の頭に代わって文章を書いてくれるわけではない。Wordも使いこなすことができれば、インデントの妙なズレ等に悩まされなくなるのかもしれないが、現状、使いこなすぞ！という思いになれないのは、Wordのスキルが上がっても、「文章を書く」という本質的な作業を避けられないからかもしれない。

### 3 守備範囲が広い

わずか7年程度会社勤めをしただけではあるが、退社時点では、3部署目で3年目を迎えており、そろそろ4部署目へ異動という時期であった。

経理や企画は、四半期単位で動くことも多く、決算

を何度か乗り越えれば、自分が処理すべき業務を理解し、それなりにこなせる状態にはなっていたと感じている（若手としてそういう業務が割り振られていたという面もあり、また、実際には数々のミスを重ね、多くの方に助けていただいた…）。

ありがたいことに、弁護士となってから企業法務・訴訟・家事事件・刑事事件等と幅広く経験をさせてもらっているが、依然として未経験・未知の分野だらけであり、弁護士業の守備範囲の広さに圧倒されている。

案件に取り組むにあたり、専門家として必要な調査を行うことは当然であるが、調べれば調べるほど新たな疑問が生じ（かつ、その疑問は解消されないことも多く）、業務範囲の広さだけでなく、その深さも底が知れない状況である。

弁護士として3、4年活動すれば、一通りの事件は対処できるようになるという話はよく聞くところではある。「一通り」の意味がやや曖昧ではあるものの、私自身があと2、3年でそのような状況に至るためには、相当急ピッチで成長しなければいけないのかもしれない。

### 4 今後に向けて

さて、文章を書くという本質的な作業に追われつつ、また、自分自身の弁護士としての成長速度に若干の不安を感じている状況ではあるものの、依頼者の課題・トラブルを解決できたり、ベストとまではいかなくとも、ベターな形で案件を終えることができたりした際など、弁護士のやりがいを感じるところである。

依頼者の期待に応えるべく、目の前の案件を何とかこなしていく日々ではあるが、そのなかで自分自身の経験・知識も積み重ね、「結構成長したかもしれないな…」と思える日が来ればと思っている。